参考資料２

シナリオ形式による将来のライフスタイル等に関する資料

〇平成１３年度循環型社会の形成に関する年次報告（抜粋）

〇 未来生活懇談会報告書（抜粋）

〇 ２０２５年の日本の姿(平成１４年版　厚生労働白書付録)(抜粋)

〇 ライフスタイルの変化に関する資料（第２回自立委員会資料）

平成１３年度循環型社会の形成に関する年次報告（抜粋）

3. 循環型社会に向けた3つのシナリオ

(1) シナリオについて

循環型社会に至る道筋は１つだけではありません。例えば、人口や経済活動の規模、技術進歩やライフスタイルなど、われわれを取り巻く状況が変われば、循環型社会の構築に向けた取組も変わってきます。また、様々な取組の組み合わせによっては、異なった循環型社会への道筋を描くことが可能です。以下では、考えられる３つの循環型社会の形成に向けたシナリオを描き、循環型社会についてのイメージを示してみましょう。

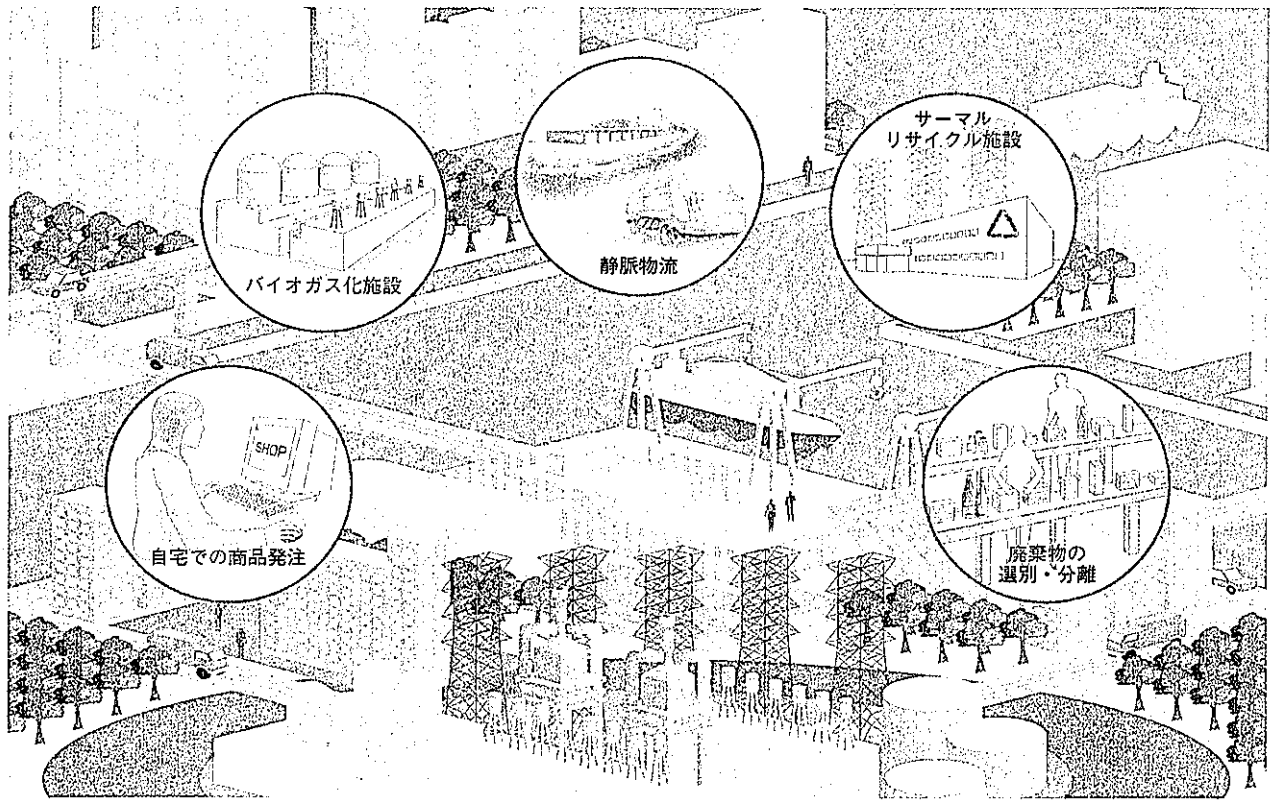
以下に示すＡ、Ｂ、Ｃの３つのシナリオについては、まず、それぞれ現在の社会から進むことができる道筋、将来の社会のイメージ、その場合の廃棄物の発生要因を説明する叙述的なストーリーを作成しました。これらのシナリオは循環型社会に関する様々な文献等を基に典型的な例として作成したもので、現実には、この各シナリオが組み合わさった形になるものと考えられますが、選択的なイメージを示すという目的のために、できるだけ差異を設けてあります。

シナリオＡは極めて高度な工業化社会となることを想定しています。そのような社会では廃棄物等は品目別ごとに収集され、高度化した静脈物流システムにより集積され、廃棄物発電などのサーマルリサイクルも活発に行われるでしょう。

シナリオＢは今までの大量生産・大量消費・大量廃棄の暮らしに慣れた私たちには、多少、忍耐と努力が求められる社会かもしれません。生活のペースを今より少しスローダウンし、得られた時間で自ら家の手入れや家庭菜園などの園芸を行ったり、ものを修理しつつ大事に使う生産的消費者への変化が求められます。また、地域でのNGO/NPO活動への参加や朝市などによる地産地消といった小さな経済で充足感を得る社会になります。

シナリオＣは環境効率性の高い社会で産業の高次化が進むイメージです。環境産業の発展により経済成長もしながら、そのような産業が供給する環境に配慮した製品やサービスによりくらしの面でも環境負荷の低減が進むという社会になります。

以上の３つのシナリオの示す社会について、それぞれの社会を示す叙述的なストーリーとともに、国立環境研究所と京都大学で開発した経済モデルを用いてシミュレーションを行いました。ここでは、各シナリオにおける廃棄物の最終処分量、地球温暖化に影響を与える二酸化炭素の排出抑制効果や経済活動の規模が、どのような傾向を示すのかについて見てみます。



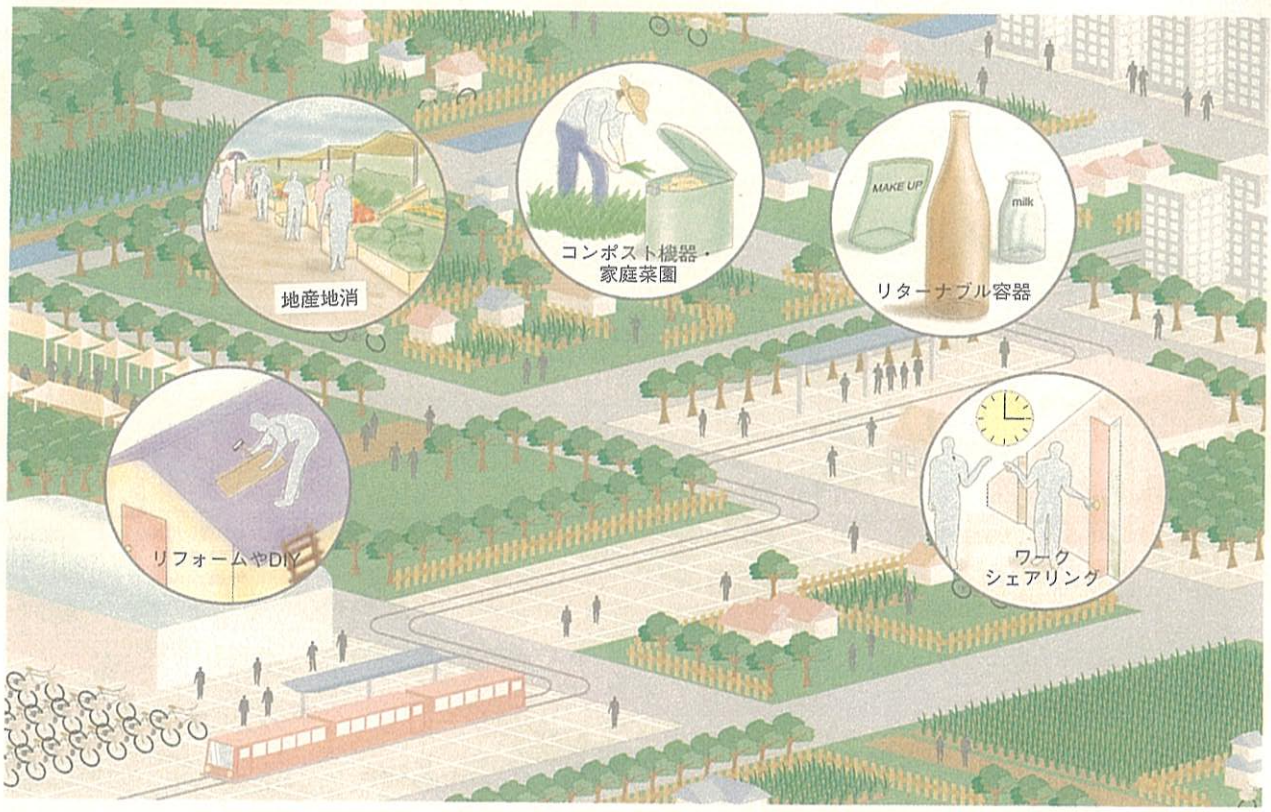
(2) シナリオA：技術開発推進型シナリオ

シナリオAでは、従来の経済社会と同じく経済成長、生産性の向上を目的とした投資が重視されます。これによる生産側の技術開発が循環型社会への主要な牽引役となります。

住居には太陽熱温水器などが設置され省エネに配慮した設計となっています。食事については、情報通信技術（IT）により自宅で商品を注文すると簡易な梱包により自宅まで配送されます。このため個々に買い物に行く場合に比べ、移動エネルギー、包装廃棄物が減少します。家庭の有機ごみはディスポーザーなどにより収集され、農地などへ輸送、還元されたり、巨大な発酵タンクでバイオガス化されたりします。交通運輸では、電気・天然ガス・バイオガス・アルコールなど比較的クリーンなエネルギー源が用いられます。また、燃費は車体の軽量化と効率の良いエンジンの開発により、大幅に向上されます。

廃棄物については、全国に分散して排出される産業廃棄物や、家庭やオフィスから分別して排出される均一性の高い廃棄物などを、同一の種類の資源に分別して広域的に収集し、大規模なリサイクルプラントに供給するなど、規模の効果が追求されます。また、静脈物流が重視され、鉄道や船舶による廃棄物輸送が推進されます。集められた廃棄物をマテリアルリサイクルするか、サーマルリサイクルするかについては、コストやエネルギー消費量を踏まえて選択されることになります。このため、高効率のエネルギーを生み出すような高効率ごみ発電施設の開発や廃棄物の高度な選別・分離及び再利用技術といった出口部分（エンド・オブ・パイプ）での対策に重点が置かれます。

これらの開発された環境技術は、海外へ輸出・移転されていき、装置産業や静脈産業等の環境関連産業を中心として高い経済成長率が達成されます。雇用については、競争社会のなかで性別、年齢にかかわらず能力のある人が雇われることになります。また、高い購買力を背景にして、活発な消費活動が行われ、新製品をいちはやく入手することなどに価値観が集まります。また、家庭においては家事の外部化・省力化が進み、これによって得られた余暇時間がレジャーや教育に消費されます。



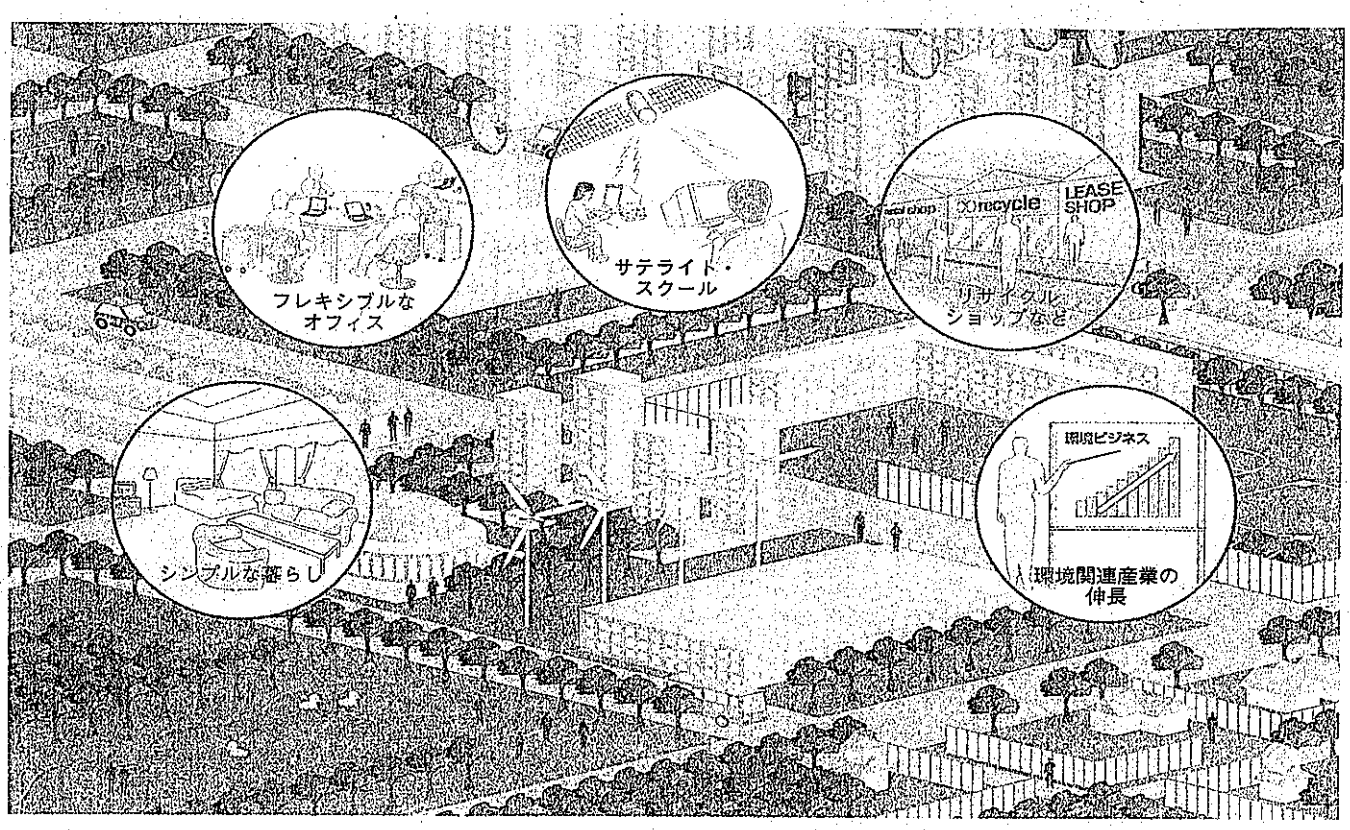
(3) シナリオB：ライフスタイル変革型シナリオ

シナリオBでは、人々のライフスタイルが環境調和型にシフトしていきます。このような消費側の変化が循環型社会への主要な推進力となります。

住居は自らリフォームをするなどして古い住宅を大事に使用します。食事については、いわゆる地産地消が基本となり、食材の大部分が地元で作られ、各家庭は地元の店を利用するため輸送の機会が減少します。また、食事はそれぞれの家庭で作られるので加工食品は多くありません。家庭の有機ごみは各家庭でたい肥化され、家庭菜園などで自家消費されます。また、路面電車などの公共交通機関の整備や自転車専用道の整備による自転車の利便性の向上などが進みます。

廃棄物については、大量消費型の社会ではなく、ものを大切にする社会であるため、そもそも廃棄物の発生が抑制される構造になっています。また、市民の環境意識が高く、買い物袋の持参、リターナブル容器の使用、分別の徹底など生活に身近なところでの取組が徹底されるほか、自治体やNGO/NPOの先導により地域内での物質循環（生ごみのコンポスト化・有機農業への利用促進、天ぷら油のエコディーゼル化など）も活発に進められます。また、事業者も、製品の製造に当たっては、環境負荷の少ない素材を優先して使用しています。

経済成長率は比較的低めですが、雇用については、様々な立場の人の社会参加を促すため、ワークシェアリングが実施されます。その結果、就業者１人当たりの労働時間は短縮され、これによって生じた余暇は家庭や地域コミュニティにおける様々な活動に費やされます。地域においては余暇を活用して、地域通貨（一定の地域に限って使用可能な通貨）による経済活動が活発化し、環境・福祉面での充実化が進みます。また、ものを大事に使う、もったいないという気持ちが人々の住宅、家具、家電製品、自動車などに対する買換えサイクルを長期化させるため、消費財の購入量は減少します。反面、長寿命であったり修理（リペア）が容易な良質の製品については、購入時は高コストでも長期的には得になると考え、このような製品の購入は増加します。家具や道具を自ら手入れしながら長年にわたって使いこなし、磨き上げていくことが尊ばれ、このような活動をサポートするDIY（Do It Yourself）ショップも盛んになります。



(4) シナリオC：環境産業発展型シナリオ

シナリオCでは、ITや環境分野での技術革新、ものの提供から機能の提供へといったビジネススタイルの変革等により、脱物質化経済が進展します。このような経済構造の改革により、循環型社会が導かれます。

所有する家財品が少なく、空間を広く使えるシンプルな住居、社員が固定した机を持たないフレキシブルなオフィスや在宅勤務の普及などにより家とオフィスの床面積が減少します。食事については、普段はそれぞれの家庭で作りますが、一方で外食や中食（市販の弁当や惣菜など持ち帰りや宅配される食事）なども行われます。家庭の有機ごみは、都市部などの人口密集地域では、収集され、発酵タンクでバイオガス化され、一方、地方ではたい肥化が進められます。また、ITの発達により在宅勤務やサテライト・スクール（衛星通信による教育）、インターネット・ショッピングなどの普及率が高く、交通運輸に対する需要が減少します。移動する場合でも、カーシェアリング（近隣家庭での自動車の共同所有）や大型車から小型車へのダウンサイジングなどが進んでいるため、環境への負荷が大幅に低減されています。

廃棄物については、ものを所有するのではなく機能を求める社会であるため、そもそも廃棄物の発生が抑制される構造になっています。市民は、環境意識としては特に高いというわけではないのですが、所有や新品に対する欲求が希薄なため、リースやレンタル、リサイクルショップ、フリーマーケットなどを活発に利用します。

また、出口より、入口での対応が重視されます。廃棄物を利用した素材による製品の開発や、電子媒体による取引の増加、商品を作って売る会社からサービスを提供する会社への転換が進みます。

投資は環境保全を目的とするものが優先され、環境関連産業が伸長します。経済構造の核に環境保全を据える形で経済の発展も重視されるため、比較的高い経済成長率が達成されます。雇用は、環境関連産業やサービス産業において増加し、女性・高齢者の雇用が現状より進みます。このような経済成長に応じて現状程度の消費活動が行われますが、個々の消費者のニーズに応える消費、余暇や教育・福祉等のサービス消費が増加します。

生活大航海、未来生活への指針

～未来生活懇談会報告書～

平成14年12月

【 目 次 】

Ⅰ． 未来生活について考えよう……3

（なぜ人生に充実感が感じられないのだろう？）……3
（未来に夢を描く）……3
（未来生活、３つのキーワード）……4

Ⅱ． 未来生活を描いてみよう……9

１． 経済社会

○人口減少社会に生きる……13
○正確な情報で安全・安心な暮らし……16

２． 家族

○自立してお互いの成長を支えあう夫婦……19
○離れていても親密な親子関係……20

○子育てに対する企業の意識の進化……21
○ニーズにあった質の高い保育サービス……22

○安心して任せられる介護サービス……23
○一人暮らし高齢者の仲間探し……24
○ＩＴ利用で快適、安心、高齢者生活……25

３． 働き方

○転職でやりがい探し……29
○仕事・趣味・家庭のバランスを保つワークシェアリング……30
○休職し自己研鑽……31
○副業でキャリアアップ……32

○ビジネスを興し、夢の実現……33
○フランチャイズ経営でミドルリスク起業……34
○人生の蓄積を活かす高齢者起業……35

○長期休暇の取得により、新たな自分の発見へ……36
○職住近接でゆとりある生活……37
○ハッピーリタイアで若くして第二の人生を楽しむ……38

４．　住まい方

○ライフスタイルにあわせて住み替える……41
○週末田舎暮らしで自然を満喫する……42

○住民参加で新しいまちづくり……43
○安心して暮らせるまちづくり……44
○コミュニティの中で人と人がつながって暮らす……45

５．　学び方

○学校選びは自分探し……49
○教科書にない勉強……50
○実践教育で楽しく学ぶ……51

○生涯をとおして自分を磨く……52
○垣根のない生涯学習……53
○個性を伸ばす手作り教育……54

Ⅲ．　未来生活はどう変わるの？……57

≪未来生活の姿≫……58

１．　未来生活の新潮流……60
（選べる生活）……60
（努力が報われる）……61
（成長とゆとりのバランス）……61
（自由な選択と社会の活力の好循環）……62

２．　自分らしいライフスタイルの選択……63
（１）ライフスタイルにあわせて働く……63
（会社に縛られないで能力発揮）……63
（起業により自分の夢を実現できる）……65
（誰でも働ける社会の実現）……66
（ゆとりある働き方が選べる企業）……66

（２）ライフスタイルに応じて住み替える……68
（ライフスタイルにあわせて柔軟に住み替える）……68
（自分の好みにあった住環境で暮らす）……69

（３）楽しく学んで個性を育てる……69
（バラエティ豊かな教育を楽しむ）……70
（実践教育で社会性や職業観を身につける）……70

（4）育児・介護の社会化が選択の幅を広げる……71
（子育てを楽しむ）……71
（保育サービスの充実）……72
（安心、活き活き、高齢者生活）……73
（高齢者向けＩＴサービスの展開）……74

３．安全・安心の確立……75
（1）教育は最大のセーフティ・ネット……75
（生涯学習でいつでもどこでも自分を成長させる）……75
（柔軟な教育システムで誰もが安心して学べる）……76

（2）再挑戦に向けた雇用のセーフティ・ネット……77

（3）住民による快適で安心なまちづくり……78

（4）情報の開示と公正な競争のルール……79

Ⅳ．明るい未来生活を実現するために……91

≪政策の方向性≫

（参考）ネット委員の意見の概要……95

○「未来生活懇談会」の開催について……105

○「未来生活懇談会」開催実績……106

4．住まい方

（住まい選びの変化①）

ライフスタイルにあわせて住み替える

武田さん一家は長男・春斗くんの誕生を機に、千葉県柏市の分譲マンションから、都心の二世帯・賃貸マンションに越してきました。住まいと職場が近くなったことで、武田さん一家は“ゆとりある、充実した生活”を送っています。

～徒歩通勤で、ゆとりある都心生活を望む人に～

昨年、千葉県柏市内の分譲マンションから、江東区の二世帯・賃貸マンションに越してきた武田夏雄さん(35歳)、明子さん(31歳)夫婦は、ともに都内に通勤する共働き夫婦です。住み替えを考え始めたのは、2年前に長男・春斗くんが誕生し、当時さいたま市に住んでいた明子さんの母親・ヤヨイさん(58歳)に春斗くんの面倒をみてもらうことを考え始めた頃です。

武田さん夫婦は当初、明子さんの両親が住むさいたまの自宅を二世帯住宅にリフォームすることを考えていました。しかし、最終的に武田さん夫婦が選んだ住まいは都心の二世帯・賃貸マンションでした。施設が充実している上に、ゆったりと、快適に暮らせる空間がとても気に入ったからでしたが、一番の決め手になったのは、やはりお互いの職場に近いということでした。「子どもが小さいうちは職場に近いほうが何かと便利」と明子さんは話します。一方、さいたまの自宅は、この機に売却することも考えましたが、将来、子どもが成長し、夫婦2人だけの生活に戻ったとき、さいたまの自宅に帰ることもあり得ると考えて、今では一般的になっている“戸建て賃貸物件市場”（一般の戸建て住宅を賃貸物件として活用するリース・システム）に登録し、賃貸住宅として活用することにしました。

江東区の今のマンションに移って、武田さん一家の生活は一変しました。大きく変わったのは何といっても通勤スタイルです。夏雄さん、明子さんとも、それまで地下鉄を利用して、会社まで片道1時間以上かけて通っていましたが、今では2人とも墨田川と、銀座の風景を見渡しながら、悠々と徒歩で通っています。そして、夏雄さんはこれまでは仕事に追われ、スポーツジムに通う余裕などなかったのですが、今ではマンションに併設されているスポーツジムで週3回汗を流すようになっています。今年2歳になる春斗くんは、マンション内の保育施設が24時間利用できる上に、明子さんがフレックスタイム制で出社が昼頃なので、朝ゆっくりと一緒にいられ、以前はひどかった夜泣きがほとんどなくなりました。また、今年65歳になる明子さんの父親の冬馬さんは、出勤前の日課のジョギングにいっそう熱が入り、母親のヤヨイさんは、春斗くんの世話をする代わりに地域の老人介護のボランティア活動に生きがいを見い出すようになりました。武田さん家族は、家族全員それぞれに“ゆとりある、充実した生活”を送ることができて、大変満足しています。

（住まい選びの変化②）

週末田舎暮らしで自然を満喫する

神奈川県川崎市に住む上杉さんは、甲斐駒ケ岳山麓で週末田舎暮らしを始めて10年になります。3年前、甲斐駒ケ岳山麓に古い農家を再生して、老後になってもそのまま住み続けられるように配慮した“草庵”を完成させました。

～都会の喧騒から離れ大自然の中で癒されたい人に～

神奈川県川崎市内の分譲マンションに住む会社員、上杉五郎さん(51歳)一家が、週末田舎暮らしを始めるきっかけとなったのは、今から10年以上前になります。

それは、その頃まだ小学生だった長男の健斗さん（20歳）と長女の美紀さん（19歳）、さらに妻の陽子さん（48歳）とで参加したグリーン・ツーリズムでの体験でした。夏休みを利用し、農村に出かけ、農村生活を体験することは当時すでに一般的になっていましたが、上杉さん一家は初めて参加したツアーで、甲斐駒ケ岳山麓の自然にすっかり魅了されてしまいました。北に八ヶ岳、西に甲斐駒ケ岳、景色が素晴らしい上に、空気も、水も、米も美味しい。上杉さん一家は朝から林を分け、川で泳ぎ、鱒を釣り、田舎生活を存分に味わい、そして、3年前についに甲斐駒ケ岳山麓に“草庵”を完成させました。300坪の土地に35坪の平屋建。地元の古い農家を再生した、いぶし瓦葺きの伝統的な日本家屋です。グリーン・ツーリズムで親しくなった農家を介して、地元の「古民家再生の会」に話を通してもらったところ、話がトントン拍子に進みました。

柱や梁は150年以上も前の昔のもので、冬になれば、薪ストーブと囲炉裏で暖をとります。しかし、上杉さん一家の自慢はこれだけではありません。密かな自慢は、老後になってもそのまま住み続けられるように配慮した住宅仕様です。将来の車椅子生活も考え、家の中はいっさい段差をなくし、廊下やトイレは車椅子が使えるように広く、また浴室・トイレは壁面に握り棒をつけるなど、さまざまな点で配慮を施しています。そして、それが住宅の品質確保の促進等に関する法律で定められた日本住宅性能表示制度で“優良”住宅の格付けがされています。現在、バリアフリー等の条件はすでにスタンダードになっていますが、数年前から、新築住宅に加えて、中古住宅もその対象となり、住宅市場の中でそれに応じた評価がなされるようになってきています。上杉さん一家は現在、土曜日から日曜の夕方まで“田舎生活”を満喫していますが、セカンドライフは、自然あふれるこの豊かな大地でと考えています。

（住まいをとりまく環境の変化①）

住民参加で新しいまちづくり

堀尾有美さんはＮＰＯ法人のスタッフとして、市役所の総合カウンターで受付案内をする傍ら、さまざまなまちづくり活動に参加しています。行政側も市民の力を積極的に活用して、質の高い行政サービスを提供しています。

～よりよいまちづくりへの思いを持つ人に～

ＮＰＯ法人のスタッフ、堀尾有美さん(25歳)は、都心から西へ30キロ、昨年、多摩地区の４市が合併して誕生した“ガーデンシティ市”の閑静な住宅地に両親と住んでいます。有美さんは、午前中はガーデンシティ市役所１階の総合カウンターで受付案内をする傍ら、午後はＮＰＯ法人「むさしのの自然と環境を守る緑の会」のスタッフとして、さまざまなまちづくり活動を行っています。

有美さんが、自然や環境に関心を持ち始めたのは、学生時代に初めて訪れたイギリスで、ロンドン郊外の美しい田園風景を知ってからです。ロンドンの中心部から北に30キロ、車を１時間も走らせると、緩やかな勾配のある野原に牛や羊が草を喰む風景が、夢のように現れるのです。美しく広がる田園風景の中で、「都市と田園が巧みに共存する、豊かで、理想的な都市生活が日本でも実現できないだろうか」と考えたことが、ＮＰＯ法人で活動するきっかけになりました。

有美さんが活動するＮＰＯ法人は、発足当初は、緑地や緑道、野川などの環境美化が主な活動でした。しかし、現在では、これらの活動に加え、ガーデンシティ市が行う都市計画事業にかかるコンサルタント業務や、市民運動公園、市民植物公園の管理事務などの行政サービスの代行業務などを行っています。特に近年は、行政が市民の力を積極的に活用し、質の高い行政サービスを提供するようになり、ガーデンシティ市では、多くの市民に行政への参加を呼びかけ、また登用を行っています。すでに市民ホールや図書館、老人福祉センターなども、ＮＰＯ法人をはじめとする市民団体に業務委託をするようになっています。有美さんが市役所で受付案内をしているのもこのためです。

現在、有美さんは、身近にあるみどりを守り育てる運動「100万本緑化運動」を進めるとともに、他の市民団体や、市民らとともに、ガーデンシティ市のまちづくりセンターから事業委託を受け、みどりに関する新しいしくみを考える「エコビレッジ構想」づくりに取り組んでいます。ＮＰＯ法人は、新たな公益活動の担い手として、環境をはじめ、子育てや介護、防災、犯罪防止など、生活にかかわるさまざまな分野で、行政や企業のパートナーとして、重要な役割を担っています。

（住まいをとりまく環境の変化②）

安心して暮らせるまちづくり

市の保健センターに勤務する細川裕子さんは、地域の人々とボランティアで高齢者や障害者の社会参加のための支援活動をしています。高齢者や障害者など誰もが安心して暮らせるようなまちづくりを市民や企業と行政が連携して行います。

～お互いに支えあいながら暮らしたい人に～

市の保健センターに勤務し、介護福祉士でもある細川裕子さん(53 歳)は、プライベートな時間を使って、5年ほど前から、地域の人々と“ゆうゆうクラブ”を立ち上げ、高齢者や障害者の社会参加のための支援活動を行っています。

もともと、市内の担当地域で寝たきりの高齢者や障害者を抱えた家庭が多く、その「家族会」のような形でスタートしたのが始まりでした。今では、月に2回ほど、40代から70代の介護経験者20人ほどが集まり、保育園とデイサービスセンターが併設された“複合施設”（市の方針で、多くの保育園に高齢者の介護施設を併設している）でレクリエーションや、茶話会などを企画しています。

ここに集まる高齢者や障害者は30代から90代までの20人～30人です。「ともすると家に閉じこもりがちになる高齢者や障害者に、まず家の外に出てもらい、仲間と語らい、そして時には保育園の園児らとともに歌い、楽しんでもらいます。それによって地域の交流が深まり、顔見知り同士がともに助けあう基盤をつくる、いわば地域との接点をつくる、そのお手伝いをするのが“ゆうゆうクラブ”の目的です。」と、細川さんは話します。

一方、医療、保健、介護の分野で行政の広域化が進み、細川さんの勤務する市でも、隣接する1市2町とともに、高齢者や障害者のケアを広域的に行うようになっています。ここでは2市2町を7地区に分け、各地区で、“いざというときに、24時間態勢で、いつでもすぐに対応できる、医療、保健、介護を一本化した総合的な緊急時の連絡ネットワーク”が整備されています。また、各地区に、介護福祉士の資格を持った市や町の職員が2人ずつ地区の責任者として置かれ、自分も介護福祉士として働きながら、地区ごとに登録されている民間事業者や有償ボランティアのホームヘルパーをコーディネートして、在宅者に派遣するシステムがつくられています。これは一人暮らしの高齢者はもとより、高齢者や介護の必要な人を抱えている家庭にとって、とても大きな安心になっています。地区のホームヘルパーの責任者でもある細川さんは、「高齢者や障害者が地域社会の一員として自立し、たとえ、多少、身体が不自由であっても、高齢者や障害者が自宅で生きがいをもって安心して暮らせるようなまちづくりを目指したい。」と話しています。

（住まいをとりまく環境の変化③）

コミュニティの中で人と人がつながって暮らす

大内千秋さんは豊かな自然環境と趣のある歴史的景観に魅了され就職を機に暮らすことになったこのまちで、インターネット上の“ご近所サークル”に入っています。サークル仲間から寄せられる地域の生活情報がとても便利で、また、たまに立ち寄る馴染みの店でサークル仲間とおしゃべりするのがとても気に入っています。

～気の合う地域の仲間との交流を深めたい人に～

不動産会社で庶務を担当する大内千秋さん（21歳）は、就職をきっかけに人口80万人の地方中核都市に移り住んで3年になります。通勤には高齢者や障害者等に配慮され、街の景観のひとつにもなっている超低床路面電車を利用しています。つかの間の通勤時間、ゆったりと走る路面電車からは、緑あふれる並木通りや潤いに満ちた水辺空間を楽しむことができます。このように美しい街並みや新公共交通システムをもつ地域は、最近増えていますが、特に、千秋さんは以前家族旅行で訪れたこの街の、すばらしい自然環境と趣のある歴史的な景観の中で、人と環境が調和していることに魅了され、ここでの就職を決意しました。最初はこの街に誰一人、友達がいなかった千秋さんですが、現在では「今夜、いつものとこで飲んでるから」とメールする仲間ができました。それは、インターネット上のご近所サークルで知りあった仲間です。

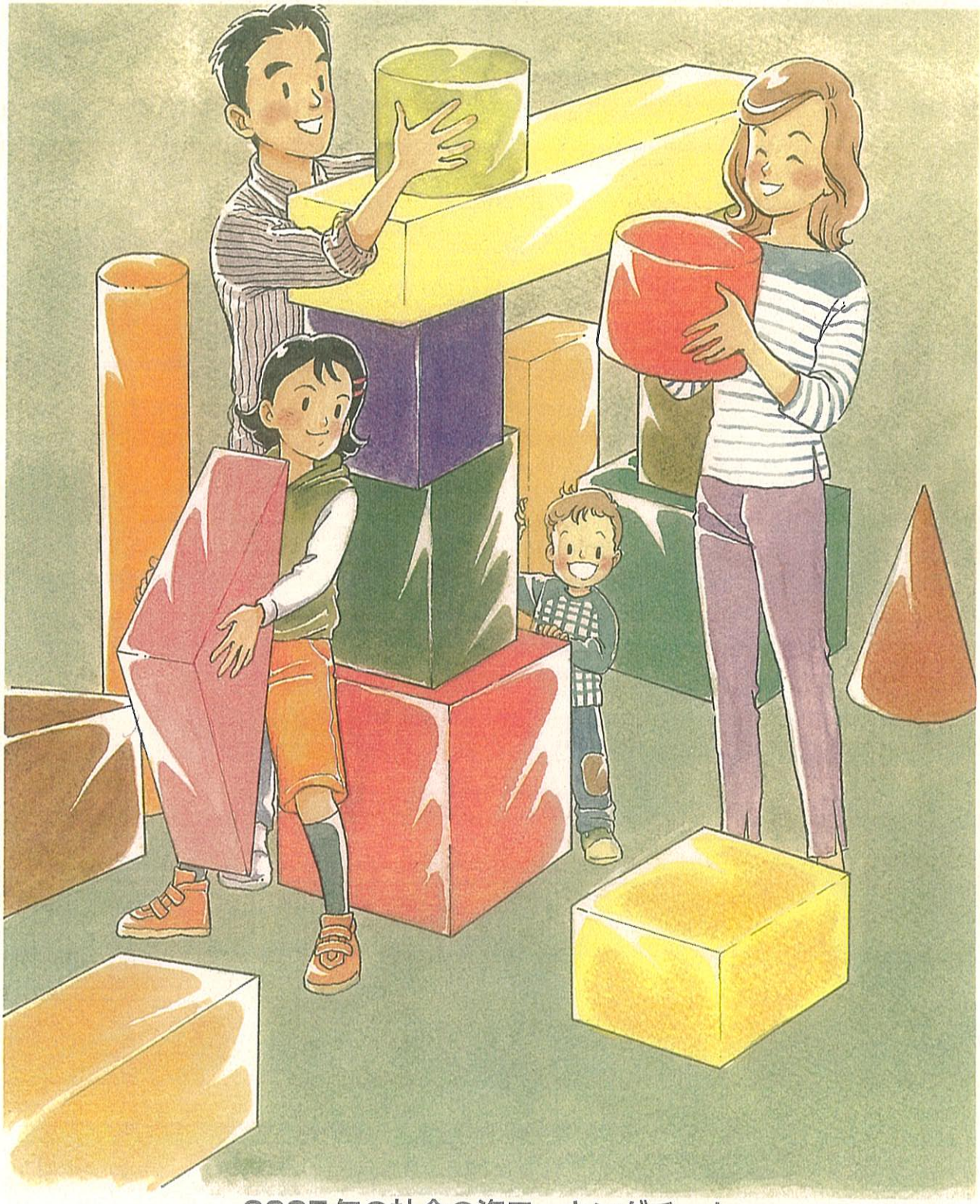
日頃は、ネット上の掲示板やインスタントメッセージなどで地域の最新情報や他愛もない世間話しで盛り上がり、休日ともなればスポーツで交流を深め、平日には気が向けば仕事帰りにサークルの誰かが必ず飲んでいるいつもの居酒屋に寄っています。このサークルには現在50人ほどの会員がおり、年齢も職業もさまざまですが、共通点は、みな地元在住ということです。飲み会などの場ではたとえ初対面であっても、日頃ネット上で「話」をして相手を知ってるので、すぐに打ち解けることができます。また、ここでは、千秋さんのように移り住んで間もない人が、日常生活で必要な生活圏の情報を得るのにも便利で、会員から安くて信頼できるスーパーから評判のいい病院、地元のおいしいレストラン、早くて仕上げのいいクリーニング店など盛りだくさんの情報が寄せられます。

千秋さんが初めて飲み会に参加したのは、ある程度ネット上での読み書きを続けて、このサークルの会員がとても親切で、真面目でユーモアがありお互いに信頼関係ができ、新しい人間関係を築けそうだと判断したときでした。このサークルは出入りが自由で、掲示板などは自分の好きなときに読み書きができ、頻繁にある飲み会も、その時に都合のよい人が集まるので無理に都合をつけるということもなく、とても気楽です。また、地元ということもあり普段着で出かけられるアットホームな感じが千秋さんは大変に気に入っており、気心の知れた仲間さえいれば、地元ほど落ち着いて遊べる所はないといいます。最近ではこのように、お互いの信頼関係の上に成り立つ自発的コミュニティは数多く存在し、他のコミュニティとの交流も珍しくなくなっています。

２０２５年の日本の姿（平成１４年版　厚生労働白書付録）（抜粋）

〈平成14年版　厚生労働白書付録〉

2025年の日本の姿



2025年の社会の姿ワーキングチーム

本書の構成

本書は、次の4部から構成されています。

第1部　2025年の日本の姿（要約） …… 2

●ワーキングチーム各メンバーが本書全体を通して描きたい姿をまとめました。

第2部　2025年の高島さん一家の暮らし …… 6

●本書のメインとなる部分で、2025年のある子育て世帯の暮らしを物語風に記述しました。多様な生き方を選択できる社会における一つのあり方と考えています。

第3部　2025年の家族の会話 …… 30

●第2部で描ききれなかった主要な場面について、会話形式で記述しました。

第4部　本書に対する若者の声 …… 38

●本書の原案に対し省内外の若者からいただいた意見を載せました。

教　育

○少子化に伴い、私立を中心に学校間で、**教育内容や学費面での差別化**が進む。
○学歴ではなく**物事への対応能力や人間性で人物を評価**する社会に。学習の目的意識が明確になり**学び方が多様化**。社会人教育や生涯学習が一般化。
○**大学生は働きながら学ぶことが主流となり、本人に対する奨学金制度が充実**。
○小学生の遊び場と安全の確保のため、**学校施設内で地域による子育て支援活動が活発化**。

現状認識

・学歴偏重。全般的に学費が高い。子育てコストのうち教育費に対する負担感が強い。
・大学生が自立しておらず、学費のみならず生活費まで親が工面。
・小学生が安全に思いきり遊べる場所が少ない。

住　宅

○**土地の高度利用（高層化、地下化）**で都市部の地価が抑制されることにより、**1人当たりの居住面積は拡大**。
○都市部では、住宅は、購入よりも**家族の事情に合わせて住み替えできる賃貸が一般的に**。

自然・環境

○下水道等の普及や汚水処理技術の向上により、**都市を流れる河川の水質が改善し、自然とふれあう場となる**。
○電線が地中化されるとともに、河川や運河に建設された高速道路が改修で地下化されるなど都市における景観が重視される。

現状認識

・地価は下落しているが、サラリーマンが自宅を購入するのは未だに困難。
・都市部を流れる河川や水路は、経済面や防災面、安全面など機能的な側面が強調されすぎており、人と自然のふれあいや景観などへの配慮がない。

日曜日

日曜午前9時半。健太はいつもより遅い朝食の準備をしている。休みの日は、料理の得意な美咲が夕食を担当し、健太は朝食当番。そういう約束。

※男女が家事を平等に分担。

美咲は皿やカップを準備した後、ソファーで新聞を読んでいる。

2人の子どもはまだ寝ている。

「さて、そろそろ起こしてくるか。」

健太は、自分に気合いを入れるように、少し大きな声でそう言うと、子ども部屋に向かう。

「おい、来夢、朝メシできてるぞお。」

来夢は、んんんとうなって、目をこすりながら布団から出る。

健太は登夢のそばにこっそりと忍び寄ると、布団をはがし、脇腹をくすぐった。

一瞬、きょとんとした登夢は、事態が飲み込めると、もがくように体をくねらせて笑い出した。

「この前のおかえしだー。」

今日は、「上田川クリーン作戦」に家族で出かける予定。

上田川は、地元を流れる川。20世紀の高度成長期に汚れてドブ川と呼ばれたこともあったが、21世紀初頭から清流を取り戻そうという運動が起こり、いままで四半世紀にわたって活動が続けられている。現在では、蛍が生息する清流に再生し、地域住民の憩いの場となっている。

※下水道等の普及、汚水処理技術の向上で、かつての清流が復活。

このクリーン作戦は、かつては、市役所の旗振りで行われていたが、今はボランティアの手に委ねられている。

※ボランティア活動の活発化。

のんびりと朝食を済ますと、サンドイッチを持ち、4人で川へ向かった。

正直にいうと、月に一度のクリーン作戦は、世の中のために、といった大それたボランティア精神から参加し始めたわけではなく、子どもと一緒に川で遊ぶことが主な目的だった。同じ考えの親が多いらしく、来夢も友達ができて楽しそうだし、登夢も興味津々で河原を冒険する。そういった意味では、気軽な気持ちで参加している。

※「親子で何かをする」ということを楽しむ習慣。気軽にボランティアという風潮。

「みなさんおはようございます。えー、今日は、この場所から、松橋、すぐそこに見える橋ですね。あそこまで、河原と水辺のゴミ拾いをしたいと思います。」

リーダー格の竹田という男が、手のひらをメガホン代わりにして、50名ほどのボランティアに今日の作業を説明する。大小のポケットがしつこいほど装備されたベストから、竹田がアウトドア派であり自然を愛していることがうかがわれる。

「えー、それでは、始めます。ゴミ袋はこちらにありますし、軍手は忘れた方用にいくつか用意してありますので、使ってください。がんばっていきましょう。」

特にいつまでに終わらなければならない、という決まりはないが、おおむね昼過ぎに終わり、解散。午後は川で遊ぶというのが、暗黙のルールになっていた。

美咲と来夢が河原組、健太と登夢が水辺組にそれぞれ分かれてゴミ拾いを始めた。

美咲と来夢は、手も動かすけど、口も動かす、といった感じで、近所の人たちや同級生とおしゃべりに興じながら、作業を進める。
時折、そおなのよ、えーほんとにい、といった断片的な言葉や笑い声が響く。

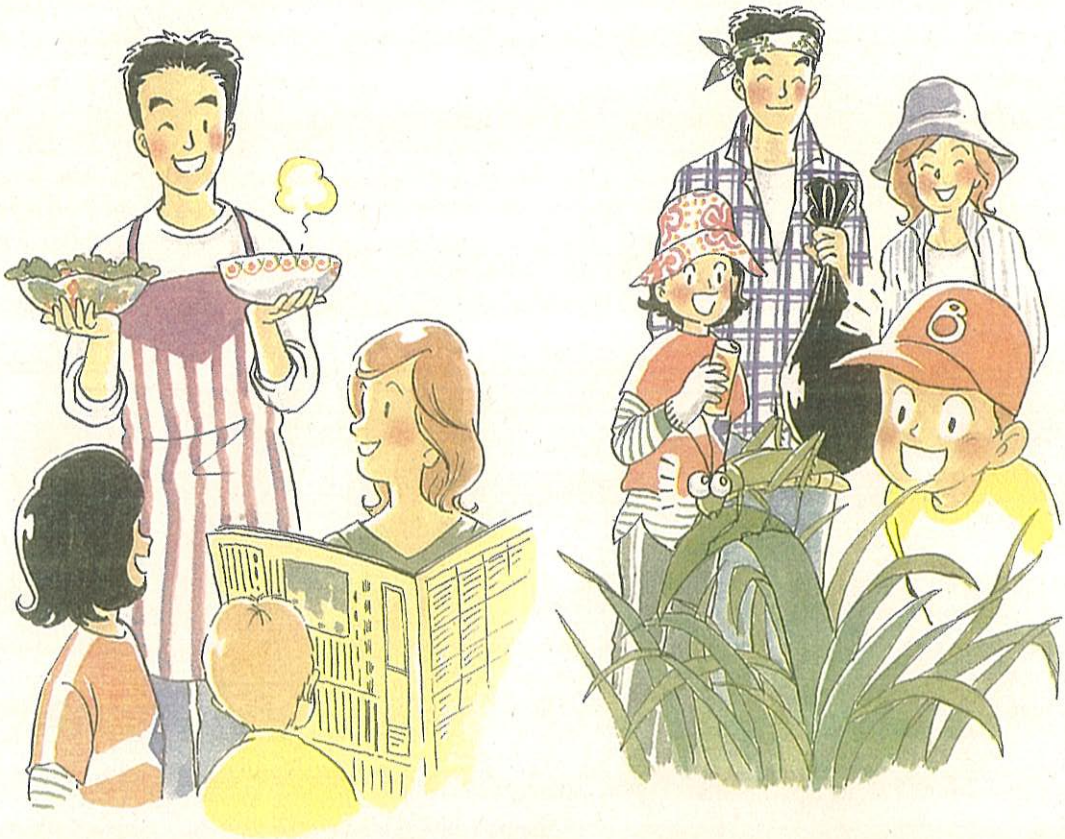
健太と登夢は、水辺の生き物を観察しながら、ゴミを拾う。といっても登夢はゴミを探しているというより、川の中の生物を観察している。
ザリガニを見つけた健太は、慎重にその背中をつまむと、登夢に見せる。ザリガニは、抵抗してハサミを開き、振りかぶる。
「ほら、登夢、ザリガニだよ。ほら。」
登夢は、うお、と言ってじっとザリガニを見つめると、
「ざにがに、がおーってしてるねっ。」
といって鼻息を荒くした。

※親子で自然とふれあうことで教育的効果とともに、人間性の涵養に。

集団で行動するとき、誰が決めたわけでもないのに、自然と取りまとめ役になる人が出てくるものだ。こうした人たちを中心にスムーズに作業は進んでいく。

午後1時を前に今日の作業が終わる。

「はい、みなさんお疲れさまでした。おかげさまできれいになりました。来月のクリーン作戦につきましては、上田川ボランティア・ネットのホームページに掲載しますので、よろしくお願いします。それでは、解散します。」
竹田の表情には、達成感が見て取れ、うっすらとにじむ汗が、きらと光った。



ビニールシートを広げ、河原で４人一緒に昼食をとる。
美咲と来夢は、今日仕入れた出口さんちの話やナナちゃんちの出来事を披露する。
健太は、それをふんふんと聞き、たまに相づちを打つ。
登夢は、自分に話を振られると答えるが、基本的には、さっき捕まえたザリガニがいるプラスチックの虫かごを見ている。美咲と来夢は、気持ち悪い、といやがったが、登夢はかなり気に入った様子。

昼食が終わると、４人でフリスビーを始めた。
そのうち、健太は、疲れたよ、といって、ビニールシートに戻り横になる。

３人は、しばらくフリスビーを続けたが、登夢がうまくできなくて、不機嫌になってしまったので、中断し、河原を散歩し始めた。

横になった健太の頭には、仕事のことが浮かんでくるが、せっかくの休みだし、と自分に言い聞かせ、ゆっくりと流れる雲を見る。

今、健太と美咲の２人は、十分に子どもと接する時間を持っている。仕事は能力主義で楽ではないし、健太が短時間勤務の分、収入は減っているが、こうした日常をお金で買っていると思えば、安いものだ。
来夢は、最近、健太とちょっと距離を置き始めた。男親から見ると、女の子は難しい。そのうち煙たがられるのかな。
登夢は、興味を持ったら、周りが目に入らない。こだわりを持って仕事に取り組んでいる美咲のことを考えると、登夢は美咲に似たのかもしれない。
つらつらと思いを巡らせるうち、健太は眠りについた。

・・・。
人の気配を感じて、健太はうす目を開けた。
にいと笑いながら、登夢がすぐそばまで近寄っている。
また何かやらかす気だな。
健太は目を閉じ、気付かないふりをすることにした。

（完）

※遠くまで足を伸ばさなくても、地元に自然があり、気軽に気分転換ができる。

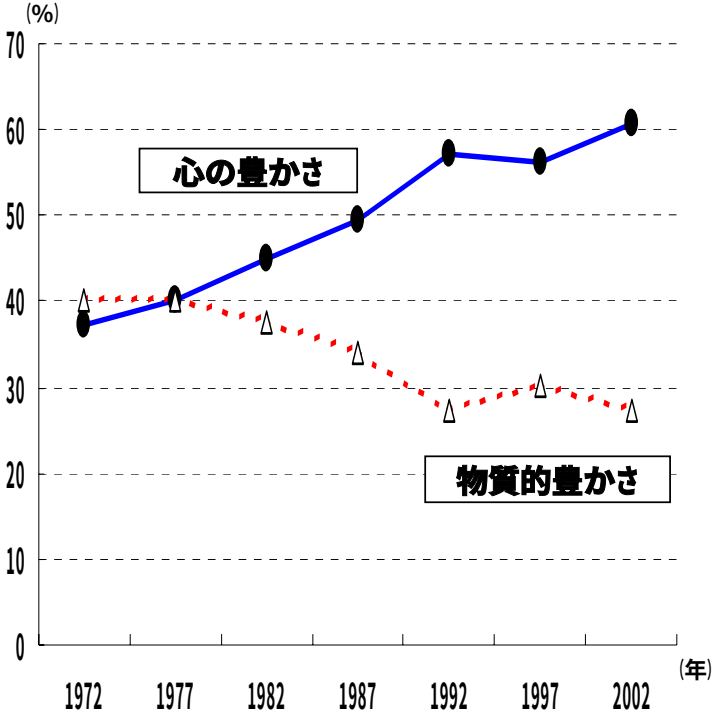
※家族のライフスタイルや価値観にあわせた働き方が可能。
※時間当たり賃金は、能力や成果を反映したものとなり、１日の勤務時間による違いはなくなる。

III. ライフスタイルの変化

III－1. 世論調査でみる国民の価値観の変化

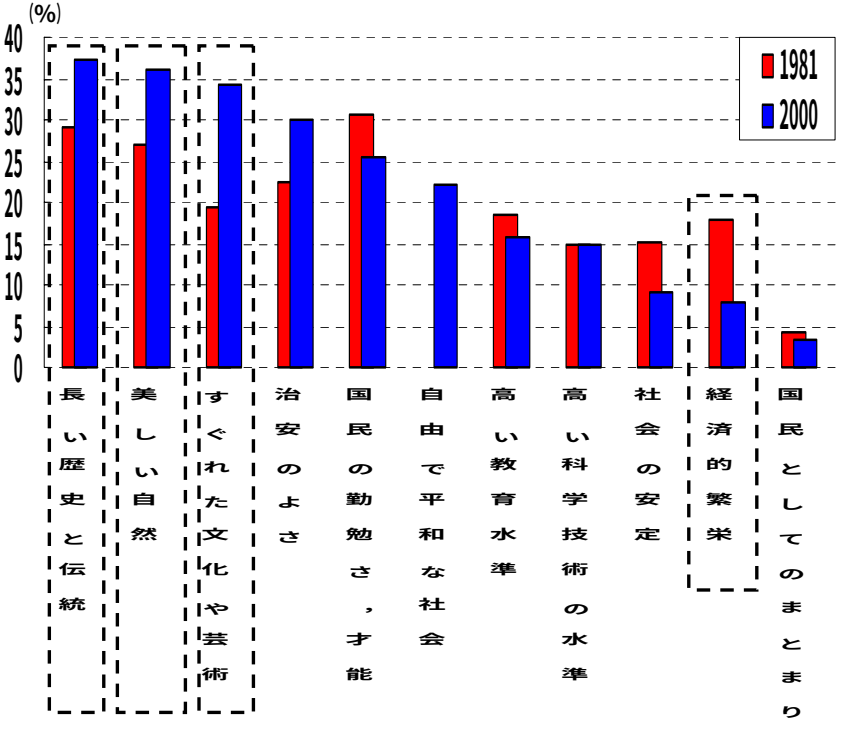
国民の価値観の変化を世論調査でみると、「物質的豊かさ」より「心の豊かさ」を重視し、また経済的繁栄より歴史・伝統、自然、文化・芸術を重視する方向に変化してきている。

心の豊かさか、物質的豊かさか



(出典)　内閣府「国民生活に関する世論調査」より作成。
(注)　心の豊かさ:「物質的にある程度豊かになったので、これからは心の豊かさやゆとりある生活をすることに重きをおきたい」
物質的豊かさ:「まだまだ物質的な面で生活を豊かにすることに重きをおきたい」

日本の国や国民について誇りに思うこと

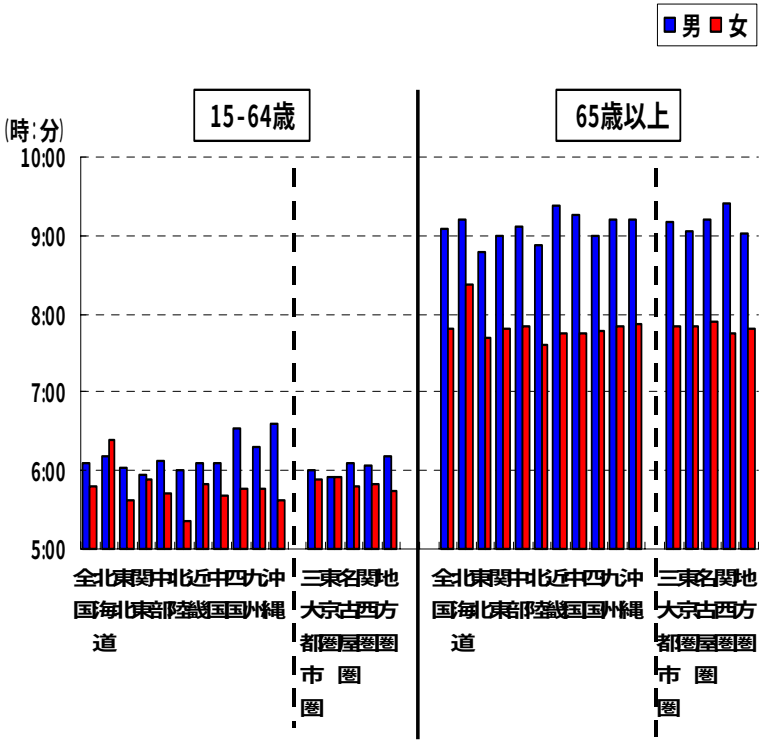


(出典) 内閣府「社会意識に関する世論調査」より作成。
(注)　1. 複数選択。
2. 1981年の調査では「国民の人情味」、「国民の義理がたさ」の2つの選択肢に分けて質問しているため、ここでは回答比率の高い「国民の人 情味」の比率で作成している。
3. 選択肢「自由で平和な社会」は1991年の調査から加わっている。

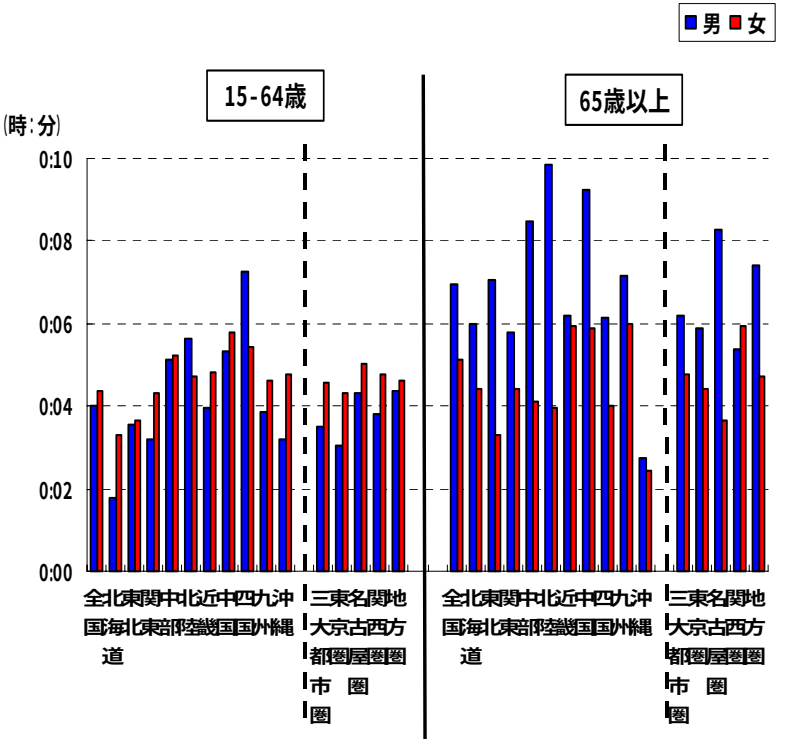
III－2．1人1日あたり3次活動時間、ボランティア活動・社会参加活動時間

自由になる3次活動時間は、概ね男性が女性を上回り、その傾向は65歳以上で特に顕著。地域別には、北海道及び北陸の女性を除いて大きな特徴はみられない。ボランティア活動・社会参加活動時間については、15-64歳では女性が長く、65歳以上では男性の方が長くなっている。地域別には、ばらつきがみられる。

1人1日あたり3次活動時間（2001年）



1人1日あたりボランティア活動・社会参加活動時間（2001年）

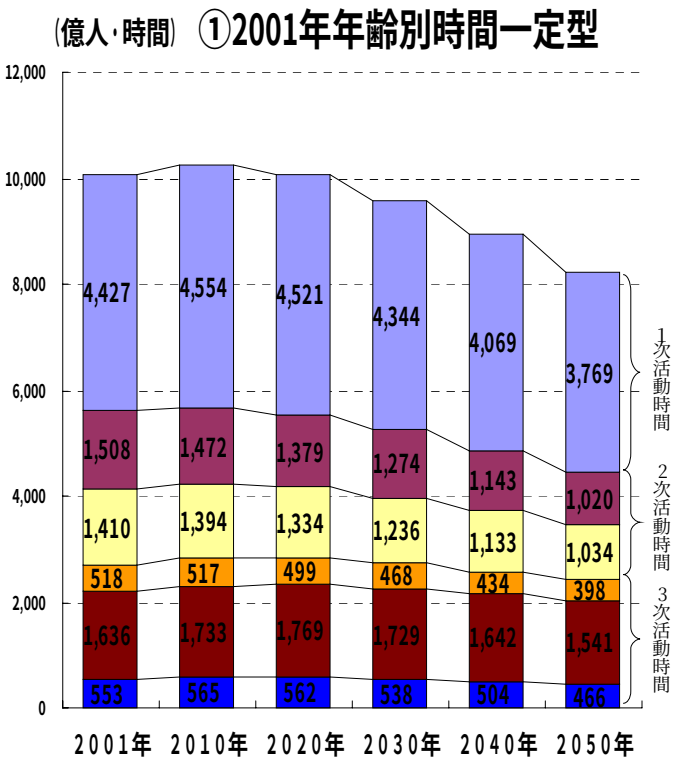


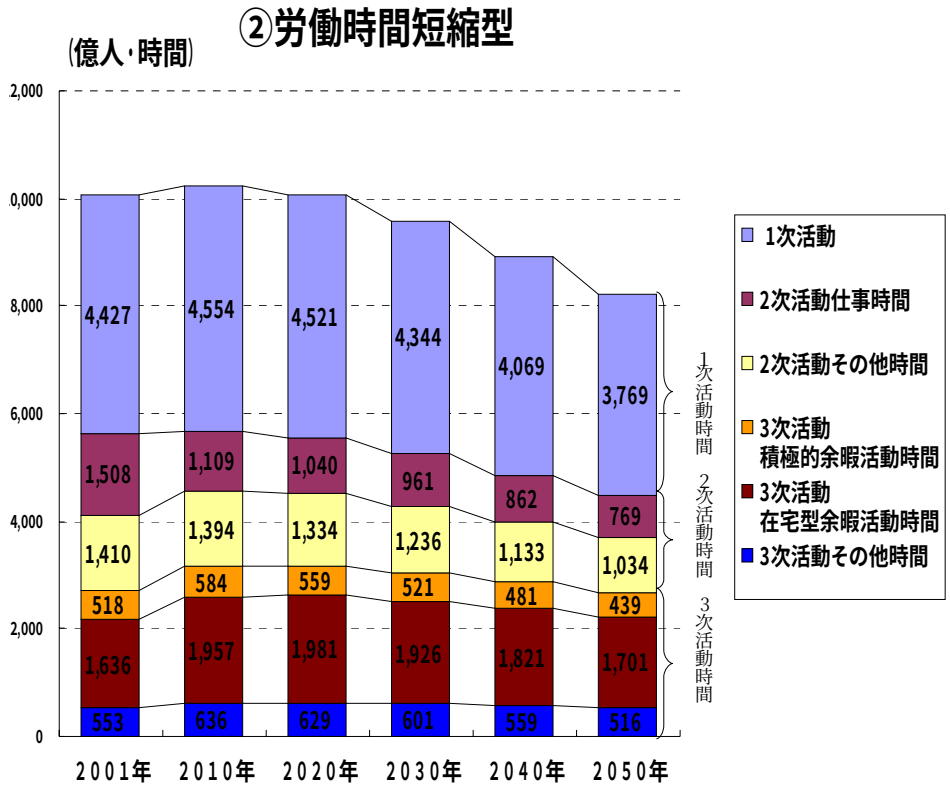
(出典) 総務省統計局「平成13年社会生活基本調査」をもとに作成。
（注） 3次活動は、移動（「通勤・通学」を除く）、テレビ・ラジオ・新聞・雑誌、休養・くつろぎ、学習・研究（「学業」以外）、趣味・娯楽、スポーツ、ボランティア活動・社会参加活動、交際・つきあい、受診・療養、その他の合計。

III－3. 国民総生活時間の見通し

今後の国民総生活時間を展望すると、高齢化の進展等に伴い、自由時間を示す3次活動時間の相対的な増加が見込まれる。労働時間の短縮を想定すると、更に大幅な増加が見込まれる。

国民総生活時間の見通し



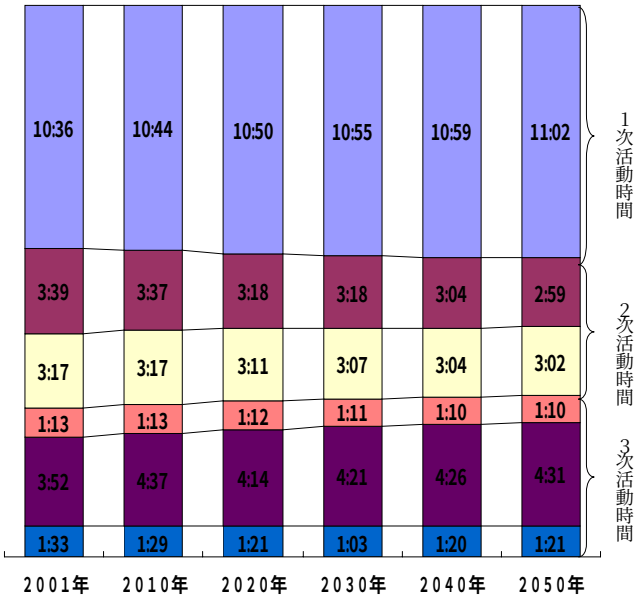


(出典)、(注) は次ページに同じ

国民総生活時間（一人あたり）の見通し

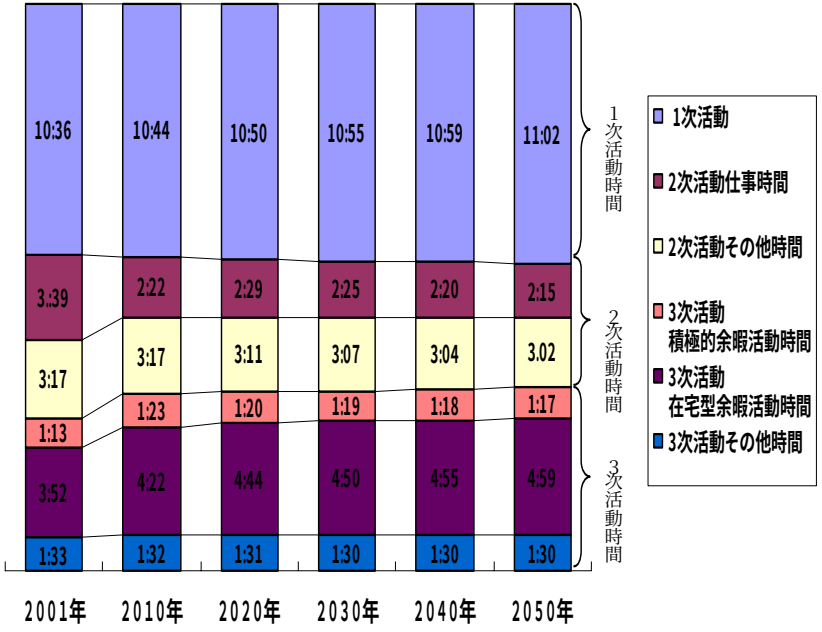
①2001年年齢別時間一定型

（単位：時間:分）



②労働時間短縮型

（単位：時間:分）



（出典）総務省「平成13年社会生活基本調査」、国立社会保障人口問題研究所「日本の将来推計人口」（平成14年1月現在）、厚生労働省「平成13年人口動態調査」に基づき国土交通省国土計画局作成。

（注）1次活動時間　「睡眠」、「身の回りの用事」、「食事」の行動時間の計。
2次活動時間　「通勤・通学」、「仕事」、「家事」、「育児」、「買い物」等の時間。
3次活動時間は3つに大別される。
積極的自由時間活動時間・・・「学習・研究」、「趣味・娯楽」、「スポーツ」、「社会的行動」の行動時間の計。
休養等自由時間活動時間・・・「テレビ、ラジオ・新聞・雑誌」及び「休養・くつろぎ」の行動時間の計。
その他時間・・・「交際・付き合い」、「受診・療養」等の行動時間の計。
2010年からの将来推計人口は中位推計を使用。
①、②表とも2001年は社会生活基本調査に基づく実績値。

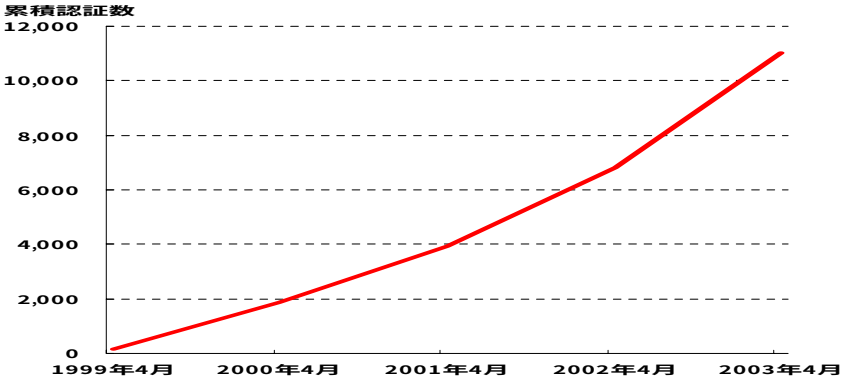
（表①の算出方法）
・総時間＝年齢別（5歳階層別）男女人口×2001年年齢別時間×365日を億人ベースで算出。
（1次活動、2次活動仕事時間、2次活動その他時間、在宅型余暇活動時間、積極的余暇時間、3次活動その他時間について算定。）

（表②の算出方法）
・仕事時間に労働時間短縮（平均では2000年の1,853時間（日本）→1,397時間（ドイツ））が2010年より達成されたとの想定を行い、仕事時間＝（ドイツ年間労働時間／日本年間労働時間）×年齢別（5歳階層別）男女人口×2001年年齢別仕事時間／10歳以上総人口で算出し表①における仕事時間と比した残余は3次活時間に各々加算。
・1次活動時間、2次活動その他時間＝年齢別（5歳階層別）男女人口×2001年年齢別各活動時間／10歳以上総人口で算出。
・3次活動積極的余暇時間、3次活動在宅型余暇活動時間、時間＝年齢別（5歳階層別）男女人口×2001年年齢別各活動時間×365日に労働時間短縮による3次活動時間に全体の伸び率を乗じたものを10歳以上 総人口で除して算出。
・端数はその他時間で調整。
・一人あたりの国民総生活時間は、総時間を人口で除したもの。
（端数の関係で総和は24時間とならない。）

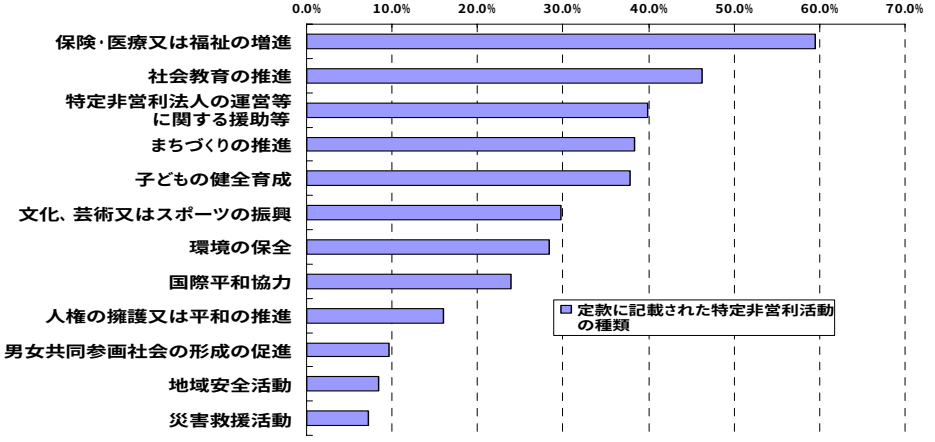
III－4. 特定非営利活動法人の増加と分野別内訳

NPO（特定非営利法人）の累積認証数をみると、全国では2003年4月までに約11,000団体に達している。これを地域別にみると、地方圏においても認証数の多い道県がみられ、活動分野別にみると、「保険・医療又は福祉」、「社会教育」、「まちづくり」等を内容とする法人の割合が高い

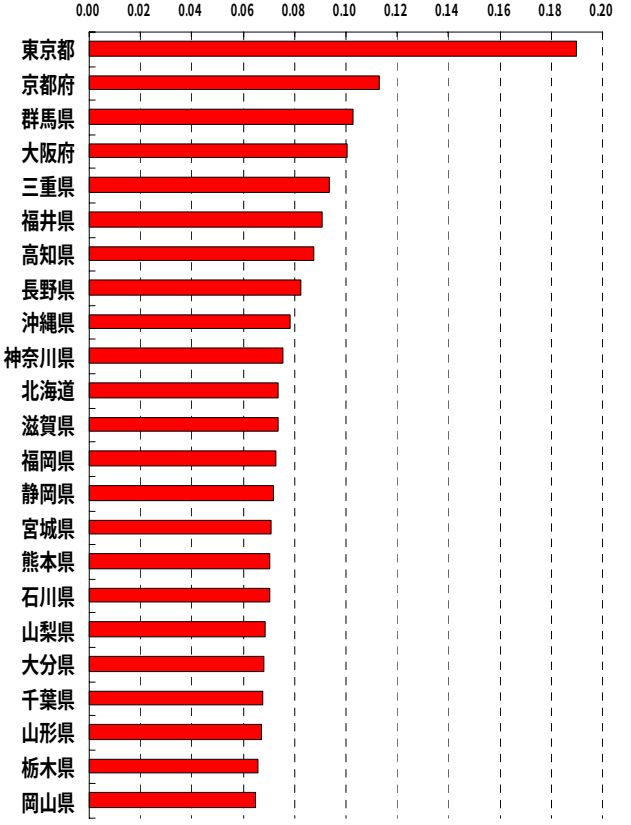
①特定非営利活動法人の累積認証数



②特定非営利活動法人の活動分野について（2003年4月・複数回答）



③人口千人あたりにおける特定非営利活動法人の認証数（2003年4月）

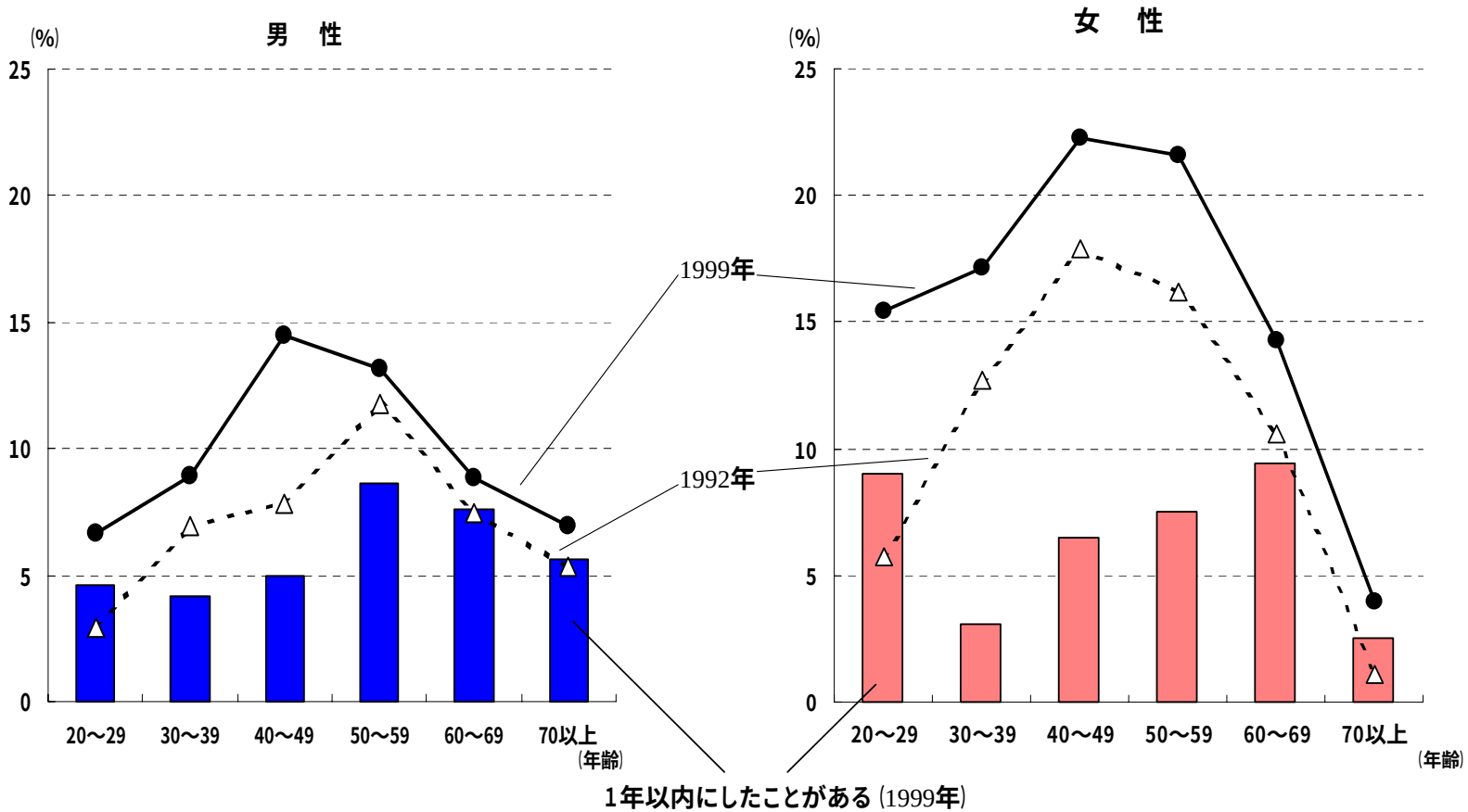


（出典）内閣府HPをもとに国土交通省国土計画局作成。
（注）③について、都道府県の列順は上位20位（23県）より配列した。

III－5. ボランティア活動への意識と参加

ボランティア活動への参加意欲は、1年以内に実際に参加した人の比率は低いものの、男女･各年齢ともに近年上昇しており、40歳代･50歳代を中心に高い。

ボランティア活動をしてみたいと思う人の割合

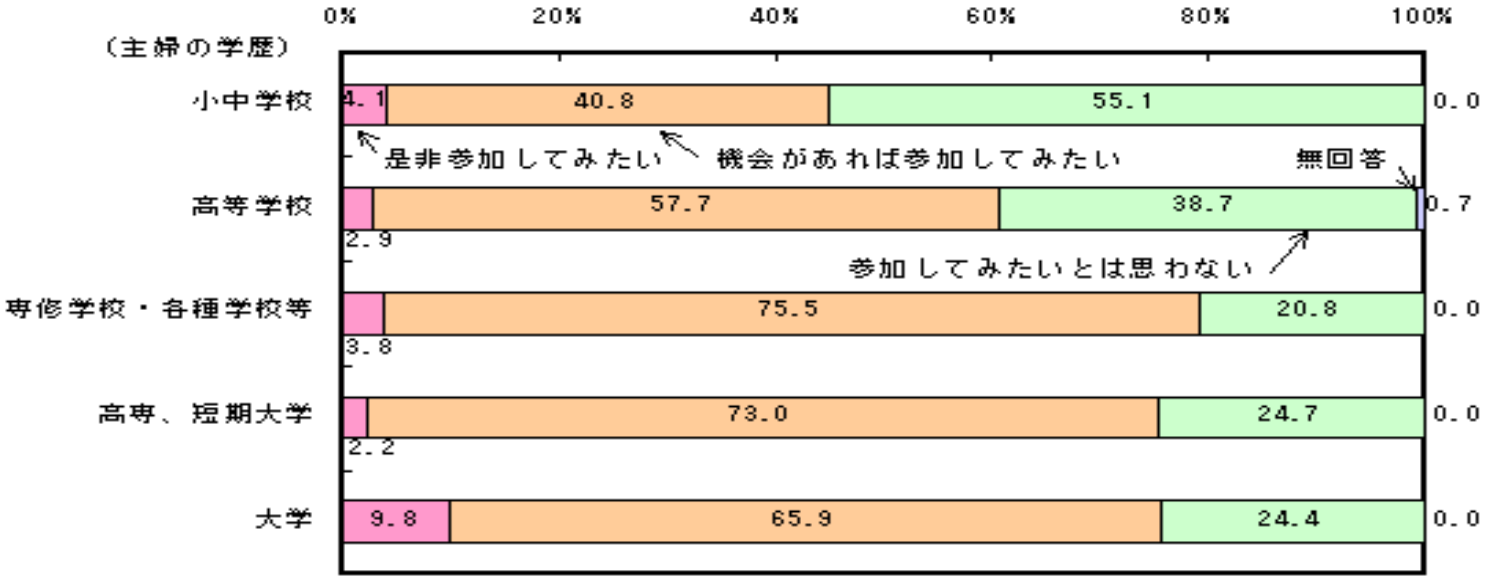


(資料)　総理府「生涯学習に関する世論調査」より作成。
(注)　ボランティアをしてみたいと思う人の比率は、「生涯学習をしてみたいと思う」と答えた人の比率に、その内数である「ボランティア活動やそのために必要な知識･技能」(複数選択) を選択した人の比率を乗じて計算している。

III－6．学歴とボランティア参加意欲の関係

主婦のボランティアへの参加意欲を学歴別にみると、高学歴の主婦ほどボランティア参加意欲が強い。

主婦の学歴別ボランティア参加意欲



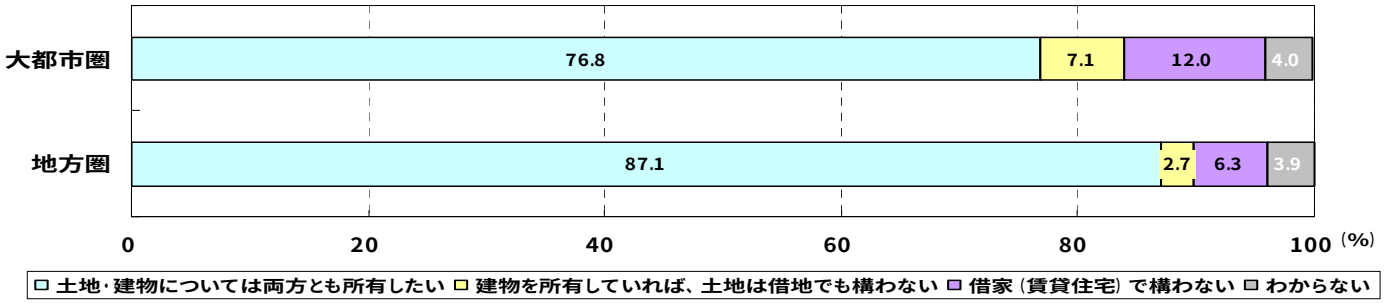
（備考）１．経済企画庁「国民生活選好度調査」（2000年）により作成。
２．無職の主婦の学歴別にみた「あなたは、今後、ボランティア活動に参加してみたいと思いますか。」という問に対する回答者の割合。
３．回答者は、全国の学歴無回答を除く無職の主婦560人。小中学校が98人、高等学校が279人、専修学校・各種学校等が53人、高専、短期大学が89人、大学が41人。

（出典）内閣府「平成15年版国民生活白書」

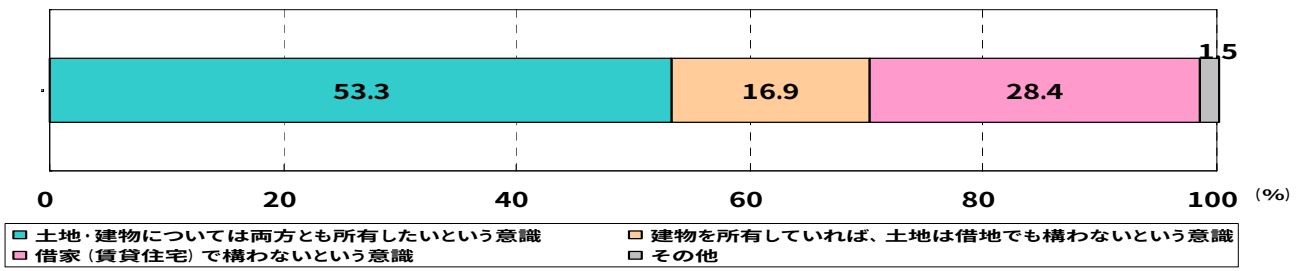
III－7. 持ち家志向

持ち家志向は、地方圏の方が大都市圏より強いが、将来的には持ち家志向は弱まるものと考えられている。

①持ち家志向か借家志向か？



②将来（およそ30年後）の住宅所有の意識としてどのような意識が中心となるか。



（出典）① 国土交通省土地・水資源局「土地問題に関する国民の意識調査（平成14年1月調査）」
② 国土交通省土地・水資源局「平成12年度21世紀の土地利用の将来像に関するアンケート調査報告書(平成13年3月)」

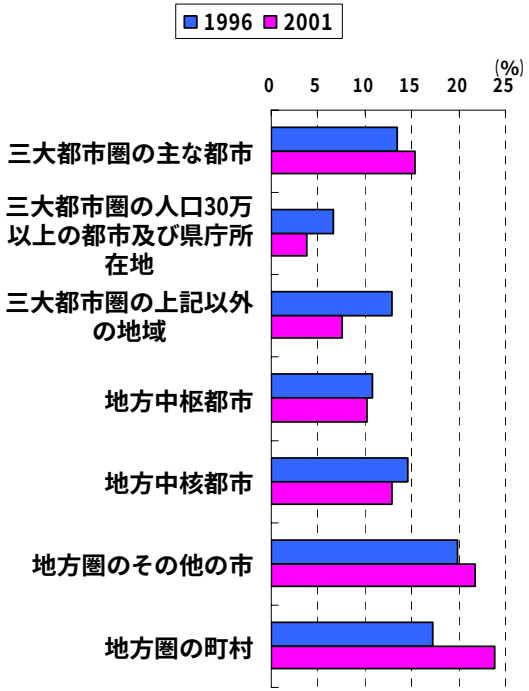
（注） ①のｸﾞﾗﾌについて 1. 調査対象は、全国20歳以上の者から層化2段無作為抽出法により抽出した3,000人。
2 .調査方法は、調査員による面接聴取で、有効回収数(率)2.257人(75.2%)。
3. 設問は、「次にご自身が住むための住宅の所有について、どのようにお考えになりますか。この中からあてはまるものを1つだけあげてください。」である。

②のｸﾞﾗﾌについて 1.調査対象は、大学職員・研究機関等の職員・研究者、アナﾘｽﾄ、上場企業経営企画役職員1,000名。
2. 調査方法は、郵送方式によるアンケート票の配布・回収で、有効回収数（率）409通（40.9%）。
3. 設問は、「国民が望ましいと考える住宅の所有形態としては、現在のところ、以前として持ち家が多くなっています。今後（およそ30年後）、国民の住宅所有に関する意識としては、どれが中心になると思われますか。最もお考えに近いもの1つに○をつけてください。」である。

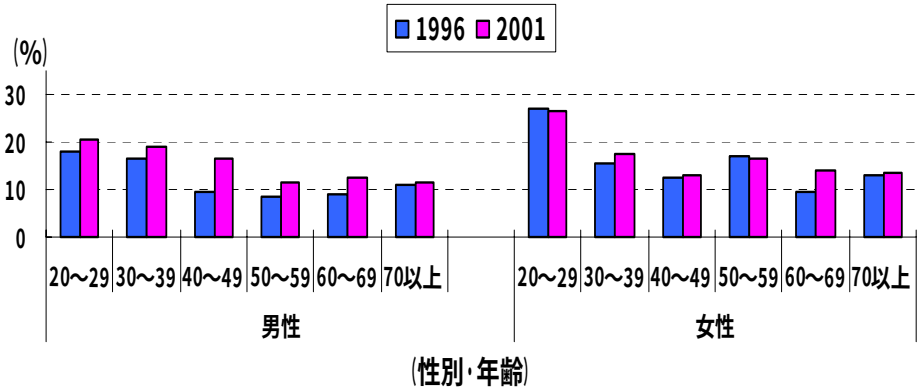
III－8. 理想の居住地域の意向（男女別年齢別）

理想の居住地域の意向をみると、三大都市圏の主な都市や地方圏の町村について選好が高まっている。男女年齢別にみると、三大都市圏の主な都市については女性の選好が強く、地方圏の町村は高齢者の選好が強い。

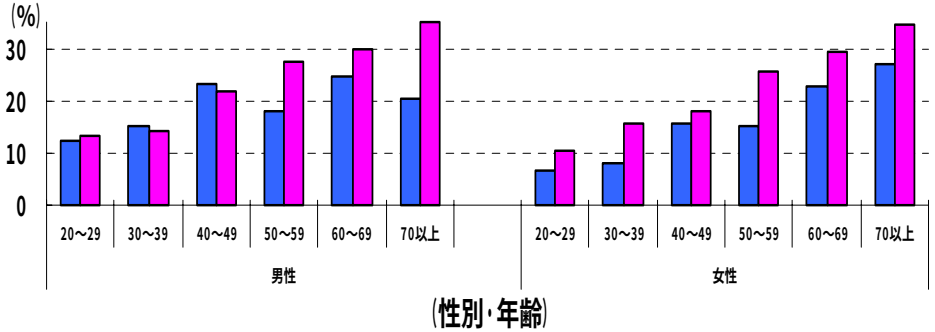
理想の居住地域（全体）



三大都市圏の主な都市（東京23区及び横浜・名古屋・大阪などの政令指定都市）（性別、年齢区分別）



地方圏の町村（性別・年齢区分別）

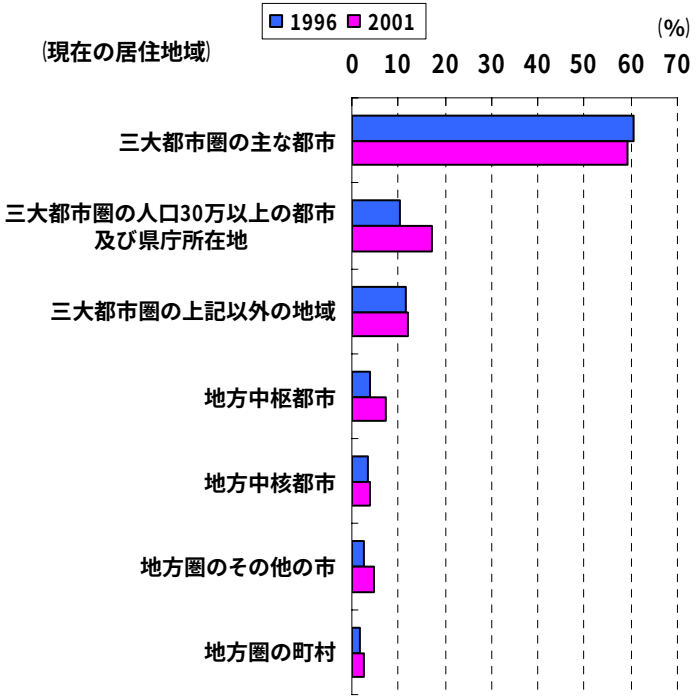


（出典）　内閣府「これからの国土づくりに関する世論調査」（平成8年6月調査）及び「国土の将来像に関する世論調査」（平成13年6月調査）をもとに国土交通省国土計画局作成。

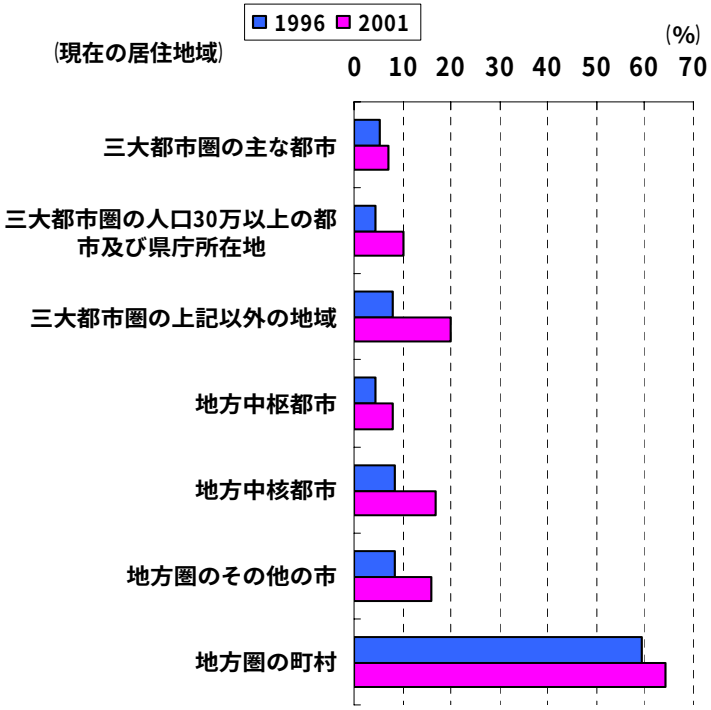
III－9. 理想の居住地域の意向（居住地域別）

理想の居住地域の意向を居住地域別にみると、三大都市圏の主な都市及び地方圏の町村ともに、現在の居住地域についての選好は強いが、他の地域に居住している者の当該地域への選好も高まっている。

三大都市圏の主な都市が理想と回答



地方圏の町村が理想と回答



（出典）　内閣府「これからの国土づくりに関する世論調査」（平成8年6月調査）及び「国土の将来像に関する世論調査」（平成13年6月調査）をもとに国土交通省国土計画局作成。